日本産業衛生学会東海地方会
地方会ニュース

発行所　東海地方会ニュース編集事務局
〒480-1195
愛知県長久手市岩作雁又 1 番地 1
愛知医科大学医学部衛生学講座内
電話（0561）62-3580
FAX（0561）62-3580
発行責任者　柴田　英治

題字　皿井　進筆

巻　頭　言

振動障害との 35 年間の関わり

名古屋大学大学院医学系研究科（保健学）　**榊　原　久　孝**

私も知らないうちに還暦を迎え、振動障害との関わりも 35 年を超えるまでになりました。私が最初に振動障害と関わるようになったのは、まだ医学部学生（4 年生）の時の昭和 50 ～ 51 年（1975 － 6 年）です。

当時、学生サークルの「名大医療フィールド（MMF）」に参加していて、無医村での検診などの活動をしていましたが、新たな活動として、当時衛生学教室にみえた山田信也先生に、岐阜県恵那郡の上矢作診療所長（当時）大島紀玖夫先生を紹介していただき、そこで林業労働者の振動障害検診を行ったのが始まりです。検診では、松本忠雄先生に診察医になっていただき、問診や検査を私達が分担しておこないました。この検診がこの地域で最初の振動障害検診で、数十人の受診があり、４割近くの受診者に手指の白ろう現象やしびれがあり、手指疼痛が強く、夜間もしびれや疼痛で目が覚めるなどの訴えがみられました。

今から振り返りますと、昭和 50 年に基発第 610 号「チェンソー取扱い業務に係る健康管理の推進について」がでていますので、私達の検診は全国的にも早い時期の検診であったといえます。この昭和 50 年の通達を始めとして、振動障害対策は、東海地方の山田信也先生や岩田弘敏先生などのご尽力で、1970 年代に予防対策、健康診断や治療などの対策が施行されてきました。これらの対策が始まって 30 年を超えており、最近の振動障害研究や予防対策の国際動向を踏まえて改訂されたのが、平成 21 年の新しい予防対策指針です。これは労働安全衛生総合研究所（当時）の前田節雄先生を中心に、私や井奈波良一先生（岐阜大学）なども加わった「振動障害等の防止に係る作業管理のあり方検討会」で検討したもので、国際標準化機構（ISO）や EU 振動指令などの内容を踏まえたものです。

その特徴として、1つは、振動工具の振動値（3 軸合成値）を工具や取扱説明書などに明示すること、2 つ目は、工具振動値と 1 日の使用曝露時間によって日振動暴露量 A（8）を求めて、その値が 5.0m/s^2 未満になるように現場での振動曝露管理をするとしたことです。工具振動値を具体的に把握して振動障害リスクを評価・管理することを求めるもので、これは EU や米国と軌を一にする内容で、障害の発生予防に重点をおいたものです。

東海地方は、製造業が盛んな地域として、振動障害や有機溶剤、じん肺、頸肩腕障害など、現場課題に即した産業衛生の研究活動が活発になされてきました。時代の変化は急速ですが、現場の変化に注目して、予防重視の対応を心がけていければと思います。

手指レイノー現象の発症時

第 5 回日本人体振動研究会（1997 年犬山にて開催）

開　催　報　告

平成25年度日本産業衛生学会東海地方会学会の特別講演1･2に参加して

藤田保健衛生大学医学部　公衆衛生学　八　谷　　寛

【特別講演１：環境因子による健康障害のメカニズムを追及する－基礎研究の成果を産業現場へ－（名古屋大学・環境労働衛生学・教授　加藤昌志先生）】

加藤先生は「可聴域」騒音による聴覚障害発生には cRet 分子という遺伝的感受性が存在することを証明し、騒音曝露の健康リスク評価では超高音域（12kHz）の聴覚閾値をバイオマーカーに採用することで感受性を持つ若年者の聴力低下を鋭敏に評価でき有用である可能性をはじめに提示されました。次に、産業現場で曝露される騒音の 40% を占める「低周波」騒音による平衡感覚障害のメカニズムを解明し、抗酸化剤服用による予防的介入の有効性について検討中であることを紹介されました。最後に、ベトナムやバングラディッシュに存在する癌多発地域の飲料水がヒ素に加えバリウムにも汚染されていることを明らかにし、わずか 15 秒でそれらを除去する浄化剤の開発（特許）に関する非常に先進的かつ実用的な研究を報告されました。いずれも、疾病や障害に対する臨床的問題意識に端を発し開始され、その基礎的研究成果を社会へ応用させた社会医学的研究であり、そのインパクトの大きさに驚きました。

【特別講演２：職場のメンタルヘルスと法－現場で生じ易い困難課題への法的に適正な対応法－（近畿大学・法学部・教授　三柴丈典先生）】

メンタルヘルス法務を平時と問題発生時に分け、問題が多発する事業所にあっては、採用･配置･モチベーション・教育研修・職務設計といった平時の人事労務管理の基本の立て直しが必要であることをはじめに指摘されました。次に、メンタルヘルス症例への対応が必要な問題発生時の原則として､｢手続的理性｣と「専門家（医）の関与」の重要性を強調しました。今回の講演では、特に離職に関する手続的理性の具体的内容が人格障害事例の判例を題材に詳しく解説されました。すなわち、復職（快復）でなければ離職に至る合理的な手続（ロードマップ）を策定し、公正に運用することの法務的重要性についてです。その手続の中に専門医の関与が含まれます。三柴先生の暖かい人柄が現れていたと思われたのが、座長の小林章雄先生からの「スムーズに離職させた人はどこへ行く」との質問に、「人間再生」とお答えになられ、本来の関心は離職者支援の活動にあることを述べられたことです。また、カンドー事件の判決で、「その他の疾病罹患者への対応との不平等」という判旨に、「それでは疾病や障害を有する人は全て解雇にしてしまえばいい」という解釈も成り立つという憤り、産業医の関与の不十分さを悔やんだ発言があったことです。企業だけ、地域に戻った離職者だけでなく、生涯を通した人間支援への希求が根底に流れる素晴らしい講演でした。

平成25年度 日本産業衛生学会東海地方学会 ミニシンポジウムに参加して

パナソニック株式会社　エコソリューションズ社　名古屋中村ビル健康管理室　**塚　田　月　美**

医師と看護師・保健師の免許取得者のうち、産業保健に従事している数の少なさ、そして、医学部教育と看護学部教育の変化があったことが、柴田英治先生（愛知医科大学医学部衛生学）と水谷聖子先生（愛知医科大学看護学部）の共通した内容として印象に残りました。

昭和・平成の社会的な変化のなか、学生、社会人として、また、産業保健分野の専門職として、育てていただいた環境等、あらゆることを思い出しながら参加することができました。学生時代の実習では、自営業の方や小規模工場の方々の定期健康診断を保健所が実施しており、特徴のある健診として、保健所実習のまとめでは、じん肺健診について実習の学びとしてグループ発表をしたこと。そして、社会人になってからは、先輩保健師の背中をみて、「ドキドキ」しながら職場訪問に同行したこと。安全衛生委員会デビューは、担当の衛生管理者から、「知ってもらうことが大切！」と、デビュー紹介をしていただいたこと。そのようなことを思い出しながら、専門性を『教える』専門職の関わりが、教育制度の変化や事業場の雇用形態の変化とともに希薄になったのではないかと思いました。

東海地方会には、活発に活躍をされている産業医・産業看護職・衛生管理者等が多く、歴史の重みと学び取る機会の多さには恵まれた環境だと思います。また、所属する事業場組織の産業保健専門職への理解の高さ、協働性の高さは、先輩たちが残してくれた宝物だと思います。学会として、職能として、専門性を後輩に伝えて育てることの重要性を感じました。一方で、看護職の場合、産業保健に従事している数の少なさと従事している所在が行政にも職能団体にも伝わらない現状があり、平成 22 年 4 月からの新人看護職員の卒後臨床研修（努力義務）を受ける機会が得られていない現状があります。継続的な教育を維持していくためには学会としても行政や職能団体との連携を図っていくことが必要だとミニシンポジウムに参加して感じました。

第26回産業保健スタッフのための研修会　開催の御報告

日本ガイシ㈱　**中　元　健　吾**

第 26 回産業保健スタッフのための研修会を、名古屋市の名城大学薬学部にて、平成 26 年 2 月 22 日に開催いたしました。当日は晴天にも恵まれ、113 名からの参加を頂きました。

『高年齢労働者』『メンタルヘルス』『栄養指導』『化学物質管理』について６名の先生方に講演をして頂きました。

講演Ｉ－１では、佐藤博貴先生（ブラザー工業　産業医）に『定年延長に伴う産業保健活動での健康管理』というテーマで御講演頂き、産業保健の目的を明確化し、コーディネーターとしての役割を意識してのバラ

ンスのとれた活動の報告を通じて、セルフケア（自己保健義務）・ラインケア（安全配慮義務）の視点からの取組みの重要性とともに、バランスのとれた活動が今後多様化する産業保健には益々重要であると再認識させられました。

講演Ⅰ - 2 では、赤津順一先生（中部電力　産業医）に『転倒災害の防止について～健康管理・職場改善の観点から～』というテーマで御講演頂き、作業環境管理・作業管理の両面からの対策の重要性が述べられ、職場の段差をなくした結果、職場外で転倒する事例が散見されるようになったとの報告もあるように、便利になってきて体幹のバランスが低下してきている現状において、『転倒しにくい体作り』対策が今後の課題ではないかと感じました。

講演Ⅱでは、井原裕先生（獨協医科大学越谷病院こころの診療科）に『薬に頼らない精神医学　労働者に伝えるべきセルフケアとは？』というテーマで御講演頂きました。『抗うつ薬の時代は終わった』という薬物依存型の精神医療への警鐘は私自身も産業医を行っていると非常に納得できる部分がありました。例えば抗うつ薬使用量やメンタルクリニックが増えたために、薬の服用が必要でない方が、うつ病にさせられ薬を飲まされている患者数が増えていると考えざるを得ないような実状を目の当たりにすると、我々産業保健スタッフは社員を不要な薬物治療から守るために『調子が悪い場合は医療機関へ』ではなく『調子が悪い場合は、睡眠・飲酒・運動等の生活習慣を見直す』ことをしっかりと教育する必要があると感じました。今後精神的健康の状況を把握するための検査が義務化され、うつ病患者が精神医療によって増やされる可能性が大いにあり、検査結果通知の際のコメントをどのように行うかは非常に重要な位置づけになると改めて感じました。

講演Ⅲでは、鈴木志保子先生（神奈川県立保健福祉大学栄養学科）に『食の行動変容につながる栄養指導』というテーマで御講演頂き、私自身、特定保健指導前後での健康診断の所見の改善率が低い印象を持っており、今後多大なコストをかけて保険者が実施している特定保健指導の質の向上が喫緊の課題と感じております。健康情報・健康アプリ・健康サイト等様々なツールが社員に身近な所に存在している中で、指導者の質がますます問われている中で、エビデンスに基づいた栄養指導や厚労省の対応は非常に参考になる内容だったと感じました。

講演Ⅳ - 1 では榊原洋子先生（愛知教育大学保健環境センター）に『法的側面からみた化学物質管理の現状と現在の化学物質管理における課題』というテーマで御講演頂き、今後化学物質のリスクアセスメントが義務化される中でリスクアセスメントの運用の大前提となる『労働者のリスク認識の向上』をどのように行っていくかが非常に重要な課題になると感じました。

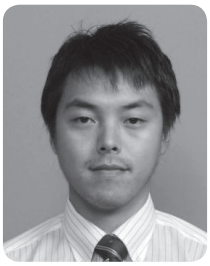
講演Ⅳ－ 2 では山下素弘先生（大同分析リサーチ）に『作業環境測定機関は作業環境測定における測定・評価・改善にどのように関わっていくべきか？』というテーマで御講演頂き、作業環境測定は測定機関に丸投げして、企業内の化学物質等に関する専門的知識を持った衛生管理者等が育成されにくい現状の中で、測定機関自身が、測定費用の価格競争に飲み込まれることなく、企業内の人材を一緒に育てていく役割を担って頂ければと感じました。

今後産業保健が直面する問題はますます多様性を増すと考えております。今回の研修でセルフケア・ラインケアの両方の視点からのバランスのとれた活動・産業保健スタッフの専門職としての質の向上の重要性を参加者の方は再認識できたのではと感じております。

本研修会は今後も継続して開催する予定です。今後とも皆様からの御支援・御鞭撻のほどよろしくお願い致します。

第5回産業衛生学術研究討論会に参加して

三菱電機㈱名古屋製作所　水　口　要　平



2014 年 2 月 15 日に名古屋市立大学にて開催された学術研究討論会に参加しました。

当研究会は発足 5 年目であり、今回は『産業衛生学術調査研究、何をしたい、何ができる』とのテーマの下、第一部では新日鐵住金名古屋製鐵所の守田祐作先生、および筆者より、現場産業医活動の現状およびこれまでの研究活動について報告を行いました。

守田先生からは、労働災害と喫煙率との関係について日本産業衛生学会全国協議会ポスター賞受賞に至るまでの経緯について、職場の理解を得ることや統計処理の苦労話を混じえた報告がありました。また、筆者からは、学会発表に際して指導者から専門家レビューを受けることの重要性、および現在の産業保健実務の実情を踏まえ、研究に必要な課題について報告しました。

第二部では、東海地方会産業医への研究支援の在り方について、世話人である斎藤政彦先生、上島通浩先生をはじめ、出席された先生方を交えて、今後の連携および進め方について議論・提案がありました。第一部での発表の中でも課題として挙げられましたが、研究を進めるうえでは、研究デザインや統計処理等について相談できる専門家がいること、および、発表について所属企業での理解を得ることが重要であるとの共通認識が持たれました。また、東海地方会学会での演題発表促進、若手を支援するための場の設定、など今後の支援の在り方について、幾つかの提案がありました。

研究は『好き』であることが前提ではあるものの、ともすれば孤立しがちな産業保健実務の中で、当研究会を初めとした様々な場面で刺激を受けることが、研究への足掛かりになるのではないかと思います。産業保健実務活動と研究活動との両立の重要性について改めて認識する貴重な機会になりました。

産業衛生技術部会第5回特別企画に参加して

静岡県産業環境センター　清　水　正　昭

はじめに

去る2013年12月14日に浜松市で開催された産業衛生技術部会第5回特別企画に参加しましたので、その概要を報告します。

講演は2部構成で参加者数は会員17名、非会員11名の計28名でした。

講演1　岩切一幸先生

（独立行政法人　労働安全衛生総合研究所）

「職場における腰痛予防対策指針の改訂について」

職場の衛生管理者等から平成6年9月発表の職場における腰痛予防対策指針は、労働現場で具体的な腰痛対策が立てにくいとの声があり、平成25年6月に約19年ぶりに新腰痛指針が発表されました。今回の改訂により現在の労働現場に合った内容になり、より具体的な腰痛対策が立て易くなっています。

また、腰痛が多発している社会福祉施設の管理者等を対象とした講習会等が計画されており、今後は新腰痛指針の積極的な活用により、医療関係者を中心とした腰痛の労働災害の減少が期待されます。

講演2　外山尚紀先生

（NPO法人　東京労働安全衛生センター）

「東日本大震災とアスベスト問題」

先の東日本大震災で破壊された建築物や不適切な解体工事等からアスベストの飛散が問題になっており、アスベストによる健康被害が懸念されています。

アスベスト対策において重要なのは、リスクの特徴と危険な作業や場所の把握、適切な工法による解体工事と労働者のマスクの着用、さらにアスベスト含有建材の見分け方、マスクのフィットテスト等を取入れた対策指向の取組み等であることを認識しました。

結びに

演者お二人共に国の検討会や審議会等の委員を務め、現場の事情にも精通されているため、より踏み込んだ内容が聞け、質疑応答時間も不足がちになるほどの盛り上がりでした。タイムリーな話題による情報交流や関係各位との懇親も含め、今後も積極的に特別企画に参加して行きたいと思いを新たにしたところです。

会　員　の　声

近況報告・ニュース編集責任者を担当して

藤田保健衛生大学医学部　衛生学　**谷　脇　弘　茂**

東海地方会ニュースは、昭和59（1984）年9月1日発刊された第１号を皮切りに、1月号、５月号、９月号の年３回発刊してきました。編集責任者は、第１号から第27号（1984～93年）までが（故）岩井淳先生、第28号から第46号（1993～99年）が吉田勉先生が担当され、第47号から第75号（1999～2009年）まで私が担当しました。その後柴田英治先生、石川浩二先生に受け継がれています。私は第23号（1991年）からニュース編集委員を担当し、主に事務局の仕事（原稿依頼や編集委員会開催案内、協賛金依頼、印刷、校正等）をしていました。編集委員会は各号で２回開催し、編集委員が集まりやすい名大医学部衛生学教室や鶴友会館を利用していました。当初の原稿依頼や編集委員会の連絡は、全て郵便で行っていました。昭和62年頃、予め決めていた編集委員会の日に、高速道路が交通事故のため渋滞し、時間内に到着できないことがありました。校正原稿は私が持っていましたので、日を変えて再度集まっていただくという苦い経験もありました。事務局を担当している時、東海地方会で何かイベントが開催されますと必ず参加し、イベント会場の写真を撮影していましたので、写真の腕も上がりました。

以上、編集委員から編集責任者を担当して、原稿執筆者をはじめ、編集委員の先生方には大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。またこれからの地方会ニュースの発展に期待を寄せます。

現在は、「石綿工場退職者の健康管理手帳健診」、「住民健診による石綿関連疾患の調査」、「N,N-ジメチルホルムアミド（DMF）対策」等に取り組んでいます。大学内では広報委員を務めています。また愛知県環境影響評価審査会委員としても活動しています。今後とも宜しくお願い申し上げます。

近況報告　初心にかえって

本田技研工業㈱　浜松健康管理センター　**足　立　留美子**

昨年９月から浜松市のホンダの専属産業医として勤務しております。

浜松のホンダは、20年前、私が産業医を目指すきっかけとなった事業所です。当時、所属していた浜松医大公衆衛生学教室の竹内教授から浜松製作所の産業医の鎌田先生をご紹介頂き、工場見学をさせて頂いたり健康管理について教えて頂いたことが、私の産業医への一歩となったのです。

あれから20年、ホンダ発祥の地である浜松製作所は、バイクの製造から2009年にクルマのトランスミッションを製造する工場となり、今年度からは事業所の名称も「浜松製作所」から「トランスミッション製造部」に変更されました。

このような変革の中、ホンダの健康管理も変わりつつあります。ホンダの各々の事業所の健康管理センターには、「健診部門、診療部門、産業保健部門」の３つの機能があります。浜松も同様ですが、近年、我が国の産業保健の流れと共に３つ目の産業保健部門の業務が増加しています。「メンタルヘルス対策」「化学物質管理の強化に伴う有害業務対策」「従業員の高年齢化に伴う健康問題」「健診の事後措置の徹底」等々、直面している課題は山積みです。特にメンタルヘルス対策は、経営の重要課題として人間尊重の理念に基づき、2009年に「オールＨｏｎｄａ心の健康づくり」方針を打ち出し、各事業所で推進しています。

産業医の一歩を踏み出した浜松のホンダで、初心に帰って産業医業務により一層励んでいきたいと思いますので、皆様のご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

転任のご挨拶

名古屋大学大学院医学系研究科　看護学専攻　**渡　井　いずみ**

2012年4月に前任の東京大学から名古屋大学に転任し、それに伴い関東地方会から東海地方会に移りました。東海地区は国内有数の製造拠点であり、この地で産業保健の研究・教育に関わることが出来ることを大変嬉しく思っています。

私は平成元年に千葉大学看護学部を卒業し、病院での臨床経験を経て富士通㈱の保健師として10年余り勤務し、システムエンジニアを中心とした従業員の健康管理業務に従事致しました。法制化以前から過重労働者への健康面談やセルフケア、ラインケアとしてのメンタルヘルス教育を行うなど先進的な実践を行っている企業で、貴重な経験を積むことが出来ました。東京大学大学院に進学後は地域看護学の研究室に所属し、公衆衛生看護学なかでも産業看護やワーク・ライフ・バランス、男女共同参画に関するテーマを中心に研究・教育・実践に携わりました。

現在の職場では東海地区の様々な地域や企業で学生実習をさせて頂いており、卒業生も育ってきています。関東地区とは異なるこの地域の特性に合わせた、またモノづくりの現場に求められる保健師とは何か、またそこで活躍できる保健師をどう育成するか試行錯誤の日々です。

東海地区での経験も浅く至らない点も多いと思いますが、学会や産業保健の発展にお役に立てるよう努力していきたいと考えています。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

入会のご挨拶

ジヤトコ株式会社　健康サポート室　**實　沢　理　恵**

この度、日本産業衛生学会へ入会し、東海地方会へ仲間入りさせていただきました。

弊社は、自動車のオートマチックトランスミッション（自動変速機：AT/CVT）専門メーカーで、日産、三菱、スズキなどの国内メーカーをはじめ、ルノー、GMなど世界の自動車メーカーにAT/CVTを供給しています。

私は以前、病院の健康管理センターで勤務していました。出張健診や人間ドックの指導を通じて、受診者の継続的な支援を行えないもどかしさを感じ、産業保健師としてこのような方々への支援を行いたいとの思いより、今の会社へ入社しました。

今の会社で、最初に思ったことは事務的な作業が多く、昔ながらの診療所としてのカラーが強いことでした。産業保健師の役割は、社員の健康管理を行うことが重要なポイントと考えます。そのために、どのような対策をすればよいか考え、それを実施していくことが業務の中心と感じており、産業医・産業保健スタッフと連携をとり、社員の健康管理について様々な取り組みを企画し、実施しています。

最初の頃は不安でいっぱいでしたが、社員とコミュニケーションをとると自然と元気をもらえ、もっとこの方たちの役に立ちたいという気持ちでいっぱいになりました。

最近では、定期的に職場を訪問し、健康情報提供を含め、私たち産業看護職を身近に感じてもらい、気軽に相談できる雰囲気作りを行っています。

産業医・産業保健スタッフの強い熱意が伝わり、今年度より、事業所内「診療所」の名称が「健康サポート室」に変わりました。社員の健康をより支援できるよう、サポートしていきたいと思います。

こんな私ですが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

インタビュー

鎌田　隆先生に聞く産業医学の道

JR浜松駅北口に出るとロータリーは黒山の人だかりで、その向こうからブラスバンドの軽快な響き。のぞいてみると、全国から選抜された高校吹奏楽部の演奏会だった。見上げれば、紺碧の空に、明るい煉瓦色のアクトシティーが聳え立つ。今日は、2014年３月22日。インタビュー会場は、肴町の魚魚一、聞き手は、久永直見と柴田英治。

鎌田　隆先生

Q 先生のお生まれは？

鹿児島県伊佐郡菱刈町（現・伊佐市）で 1934 年に生まれました。県北の山奥で、金鉱山で有名なところです。父は内科医で、子供は 10 人、私は７番目でした。田舎の医者で、受診者は保険証などは持っておらず、米や野菜が診療費代わりになるのを見て育ちました。長男は九州大、次男は熊本大を出て､その後医師になりました。他のきょうだいには、教師になった者も何人かいます。中学の時に父が亡くなりましたが、兄たちの助けで、私も医師を目指し、1960 年に鹿児島大を卒業しました。長男は今年百歳になりますが、名古屋の養護施設で週２回元気に医師の仕事をしています。92 歳の姉、78 歳の妹も共に健在です。大学時代の同窓会は毎年やっていて、卒業時 45 人いた同級生はすでに 13 人亡くなっています。

Q 医師になられた初めの頃は？

医学部卒業後は、視野を広げたいと大学の友人３人と東京に出て自衛隊中央病院と三宿病院でインターンをしました。１年が過ぎ、医師免許を得た時には、兄２人は地元で医師として活躍していましたので、故郷に帰る必要はありませんでした。私は潜水医学に興味があったので、広島にある自衛隊江田島病院に勤めました。50 床の男ばかりの病院で、医師は 15 人ほどいました。医師である私も射撃やカッターを漕ぐ訓練も受けました。３年目の夏には、遠洋航海訓練があり、外国製のフリゲート艦３隻で、３ヶ月かけて舞鶴、伊勢 (参拝のため)、横須賀、グアム、ニューカレドニア、オーストラリア、ニュージーランド、フィジーを回りました。隊員たちは実戦さながらの訓練をしていました。船は近海ではよく揺れましたが、太平洋に出るとほとんど揺れず、星が海に映っていました。私が乗ったのは 300 人乗組みの艦船でしたが、仕切り壁のないトイレには閉口しました。航海中に虫垂炎が発生して手術助手をしたり、宮島から江田島までの遠泳訓練中の隊員の口に飛び込んできた魚を飲み込んでしまう珍事もありました。その頃、自衛隊に体育学校ができ、江田島関係者では鶴嶺治さんがいました｡彼はその後、東京五輪・200m 平泳ぎで６位入賞しています。

【注：鶴嶺さんは、のちに中京大水泳部を指導。】

当初目指していた潜水医学の研究に代わり、自衛隊所属の医師であったことで、もらえた１年間の休みを利用して法医学の研究をしました。鹿児島大から岡山大に移った法医学の教授の下で尿中の線溶酵素系に関係するアクチベータの研究で学位をもらいました。法医解剖も 100 例ほど経験しました。思い出の多い６年を江田島病院で過ごしましたが、学位取得後島内にあった 100 床の一般病院の内科にかわりました。住民健診、地元の看護学校で解剖学と生理学の授業を担当するなど雑学的な活動をたくさんしました。

Q 浜松に来られた経緯とホンダでのお仕事は？

子供が小学校５年になると子供の教育のことが心配になります。その頃本田技研工業の医師募集を雑誌の求人欄で知り、東京の本社での面接を受けました。運よく採用が決まり、1973 年から浜松工場の医師として赴任することになりました。卒後 12 年経っていました。工場で働く従業員は 4,000 人で、医務室には内科、耳鼻科、外科、精神科の医師が交代で診療を行い、看護師４人、放射線技師１人もいました。全く知らない所でしたが、健康診断は遠州病院から検診車に来てもらう一方、近くの開業医の先生方にも世話になり、静岡県西部医療センターの勤務医の先生に健康診断の手伝いと判定をしていただき、だんだん馴染むことができました。ホンダでは工場長が同世代で私のいうことを聞いてくれ、６年後に健康管理センターを新築してもらいました。

Q 産業医として社員の健康管理の体制をどのようにつくられましたか？

健康診断の事後指導では、家族を巻き込んだ支援をしようと思い、そのために看護師を４人から６人、保健師、栄養士薬剤師を各１人増やしました。栄養士、保健師、看護師に社員の奥さんと面談させて本人の健診結果報告書を見せながら食事などの指導したことがありました。しかしこれは社員には不評でやめました。プライバシー保護のルールが確立している現在から考えると配慮が必要でした。

新設された浜松医大からホンダで診療させてくれないかという話があり、内科、婦人科の先生に、それぞれ週１単位来てもらいました。健保組合の援助を得て、子宮がん検診もしました。胃の内視鏡検査、ピロリの除菌も早くからやっていて、効果を上げていました。浜松医大の先生方のお世話である程度のことはできるようになり、この関係は今でも続いています。4,000 人の社員以外にも関連会社の人たちも同じ健保に入っていましたので、彼らの健康管理もしました。

一般健診のやり方については、当時活躍されていた野崎先生、福渡先生とも意見交換して 30 歳、35 歳、40 歳に全身チェックができるものをやろうということになり、これが現在の社内健康管理の基礎になっています。

Q 浜松工場で印象に残る活動は？

騒音性難聴が発生していたので、聴力検査を６人同時にできる設備を入れて、早期発見と対策の強化に努めました。余談ですが、浜松でも新幹線の騒音問題が起こりました。NHK から取材の申込みがあったことを覚えています。

トランスミッション、ボートの船外機の組み立て作業では、上から吊るした工具を使っていましたが、作業者の手に負担がかかっていたようです。手根管症候群がアメリカで問題になったことを受け、狭山の研究所にお願いして、当時名市大の松本忠雄先生の協力をいただきながら、振動が少なく、軽い工具を開発してもらいました。オートバイ運転時の振動を減らす松本先生の経験を生かしたのです。

当時はまだ健診の中身が決まっていない中、有機溶剤健診は貧血検査が中心でしたが、硫酸銅の液に一滴ずつ血液を落とし、それが浮いたら本人の目の前でこれを見せながらあなたの血液は薄いと説明していました。

THP（トータル・ヘルス・プロモーション）の活動が始まった時は、浜松工場に 1.5km のウォーキングコースを作り、昼休みに一周すると、コーヒー券がもらえるような仕組みを健保に頼んで作りました。

Q 赴任された当時は今のように産業医が勉強する機会が多くない中でのご苦労は？

ホンダで働き始めた頃、静岡県で活躍していた国鉄の清水善男先生、旭化成の牧角淳先生、東海健診センターの齊藤俊二先生らとともに勉強会をしていました。1977 年には、労働衛生コンサルタントの資格を取りました。口頭試問の試験官は、輿重治先生と和田攻先生だったと記憶しています。

鈴鹿、和光、狭山、朝霞、熊本などの生産拠点や研究所を担当する産業医が３カ月に１回集まり、私がまとめ役になって勉強会をしました。自動車メーカーの産業医の会合も年２回あり、トヨタの柏木正雄先生、入谷辰男先生、日産の小田登先生らが来ておられました。始まった頃は一泊二日の会で、二日目は行楽やレクレーションなどをしていましたが、世の中がだんだん厳しくなる中で、勉強だけの会に変わりました。

Q 国際的な企業であったことで経験された海外での活動にはどんなものがありましたか?

ホンダにはＪリーグができる前からサッカーチームがあり、東海地区のリーグでは３回くらい優勝していました。たまたまハワイにいた、有名なブラジルのペレの指導を受ける機会があり、私も興味が

あったので、チームドクターとしてついていきました。ブラジルにもホンダの工場があり、現地のサッカー指導者を日本に呼ぶこともありました。海外に滞在する社員とその家族の健康管理という目的もあり、当時の私はサッカー関連の機会を見つけてブラジル、アフリカのナイジェリア、東南アジア、中国、韓国などを回りました。

ホンダの海外事業所派遣社員と家族の健康管理では、いろいろな見聞をしました。フランスでは、驚いたことに従業員が昼にワインを飲む習慣になっていました。しかし、ワインを飲みすぎて午後の仕事ができない現地人労働者が多くなったため、後日、やめになりました。イタリアでは、社員は週末に車で６時間もかけて子どもをローマの日本人学校まで送っていました。ナイジェリアでは集団強盗が多く、派遣された社員はある程度の現金を持ち歩き、襲われたらそれを渡すように指導されていました。治安の悪い中、苦労していたようです。

Q 産業医活動の中で、メンタルヘルス対策ではどのようなご苦労がありましたか？

私が赴任した頃から社内の診療所に精神科を置いていたのは、やはりそのニーズがあったからです。メンタルヘルスに関する相談は当時は看護師、保健師にやってもらっていましたが、件数は多くなかったと思います。メンタル不調に陥った社員を労務は解雇しようとすることもありましたが、私はもう後がなくなる社員の解雇は避けたいと思いました。そこで、三重大の坂本弘先生に管理監督者教育をお願いし、６カ月間月２回、傾聴法など教えて頂きましたが、せっかく教育を受けてもすぐに転勤してしまうという問題もありました。

オートバイ製造ラインでは、以前は部品からスタートし、最終的に製品のオートバイが完成して車内で試乗点検するところまでやっていましたが、今は部品だけを作る工場になっています。若い作業者はオートバイなどの完成品を見たことがなく、単純作業の繰り返しの中でメンタル不調になる人が増えた背景になっているのではないかと思います。以前は会社でのイベントがたくさんありましたが、最近の若い人たちはこれらに参加しなくなっています。１人で遊ぶ人が多く、自動車もオートバイも欲しくないという人が増えているのは会社の営業面からも困ったことになります。管理職の報酬は年俸制に変わり、実績を求めるシステムになりましたが、その一方でそれについていけない人もいます。

Q 静岡産業保健推進センターでのお仕事は？

ホンダの定年は 60 歳でしたので、嘱託として数年間産業医を続けました。浜松工場から東京本社に移って欲しいという要請もありましたが、私は従業員の顔を見ながらやる仕事が好きで結局最後まで 26 年間浜松にいました。産業保健関係の会合があれば東京本社へ行くという活動でした。そういえば、平成７年の地下鉄サリン事件の日にちょうど本社での会議がありました。私の乗った地下鉄の列車が舞台になった霞が関駅を通過したので不思議に思ったことを覚えていますが、大きな事件が起こっていたことをあとで知りました。

ホンダをやめるときに 1999 年に静岡労働局から請われて静岡産業保健推進センターの所長になりました。センターで取り組んだ仕事の一つが、作業環境管理がわかる医師を育てることです。県下の労働衛生工学の専門家の協力で喫煙室の設計も含めた研修をしています。政府の方針で、2012 年には、静岡センターは連絡事務所になり、神奈川センターと一緒にやることになりました。しかし、2014 年度からは静岡産業保健総合支援センターとして愛知のセンターと一緒にやることになります。私は引き続き所長を務めていますが、医師会との協力体制や地域センターの活動の充実など、大変な課題があります。メンタルヘルス不調の相談が１回に制限されるといった点の改善も課題です。医師会は協力すると言っていますが、まだそのための仕組みができていません。

2003 年には、第 13 回産業医・産業看護全国協議会を浜松で開き、企画運営委員長を務めました。聖隷健診センターの坂元富美夫さん、静岡県産業環境センターの土屋眞知子さんらが熱心に取り組んでくれて、初めての事業所見学会をヤマハ、聖隷健診センター、ホンダ、静岡県産業環境センターで開催しました。全国協議会で今も見学会が続いているのは嬉しいことです。

Q 先生から見た今後の産業衛生の課題は？

私自身が健康診断を基本にして人を診ていました。メンタルヘルスの問題でもその人がどんな仕事をしてどんな悩みを持っているかをきちんととらえなければならないと思います。法改正でストレスチェックが導入されますが、今後は働く人々がどのような生活習慣をしているのか、睡眠はとれている

のか、特に看護職の人々にはつかんでほしいと思っています。

医師はもっと工学的なことを勉強した方がいいでしょう。有害業務に関わる工学的対策、作業管理に関わる人間工学などは医学部を出ただけでは身につきません。どこかで勉強できるようにして欲しいと思います。

今の産業保健の活動は 50 人以上の事業所を対象にやっていますが、本来、働く人々全員を対象にしなければなりません。地域産業保健センターで熱心に活動されている開業医の先生方も多いのですが、それを活かせるしっかりとした仕組みを作らなければなりません。ホンダでも下請けがあり、休んでいる人をみると体調には問題なく、地域のイベントに参加していたことがわかりほっとしたこともあります。小規模の事業所で働く人たちの顔を見て支援することが大切です。

インタビューを終えて

鎌田先生からは、若い頃のことも含めてたくさんの興味深い話を伺いました。先生の場合、自衛隊員の健康管理が出発点で、思い切ってホンダに入られ、産業医として大きな貢献をされ、さらには産業保健推進センターで全産業の安全衛生水準の向上のために力を傾注されるという末広がりの活動を展開されたのだということがよく分かりました。その結果、先生は、労働大臣から功績賞（1991年）、中災防から緑十字賞（1984年）を受賞しておられます。「私は現場の働く人の顔を見て仕事をするのが好きだ。」との先生の言葉は、とくに印象に残りました。なお、インターネットで先生の学位論文は“Fiblinolitic activity of proactivator and activator in human urine”であること、しっかりした基礎研究の経験が先生の現場の仕事の基盤にあることを知りました。今後、先生が、お兄さんのようにお元気に仕事をされることを祈念し、私達をご指導くださるようお願い致します。

（文責　柴田英治、久永直見）

大　学　教　室　の　紹　介

浜松医科大学健康社会医学講座の紹介

当講座は尾島俊之教授のもと「自分がより成長し、人々の成長を支援する」ことを理念とし、「教育、研究、社会貢献について、バランス良く成果を上げる」ことを方針として活動しています。現在教員４名、補佐員２名、大学院生（博士課程）10 名、研究生３名、共同研究員等 10 名が在籍しています。

健康社会医学講座とは

平成17年４月に旧衛生学と旧公衆衛生学講座が統合して誕生しました。医学科の公衆衛生、産業衛生教育全般を担当し、社会疫学を中心とした様々な疫学研究に取り組んでいます。本稿では産業保健分野を中心にご紹介します。

教育

健康社会医学Ⅰ（３年）、Ⅱ（４年）では産業保健、環境衛生・環境測定等を含めた講義を行っています。実習は、

① 学外小グループ実習（３～４人で近隣の保健所・事業場等を訪問。近隣の保健所長、専属産業医等に、臨床教授等としてご指導頂いています）

② バスツアー実習（静岡県西部保健所との共催により，地域医療と産業保健の第一線現場の訪問見学）

③ 環境測定実習（学内）

を実施しています。また、３年次に約一か月半かけて行う基礎配属では、現場のニーズに基づく調査研究を行っています。今までに産業保健分野では、職員健診データやレセプトデータの分析を行ってきました。

研究

高齢者を対象とした大規模コホート研究JAGES（Japan Gerontological Evaluation Study）プロジェクト、小規模事業場等における食に関する社会的弱者対策に関する研究、生活習慣病予防に関する研究、健康の社会的決定要因やソーシャルキャピタルに関する研究、柑橘類の健康増進効果に関する三ヶ日町研究、母子保健に関する研究、大震災に関する研究等の共同研究を中心に行っています。

社会貢献

平成25年に日本産業衛生学会専門医研修施設の認定を受けました。指導医である西山慶子研究員、大久保浩司臨床教授を中心に、研修協力施設として財団法人静岡県予防医学協会（竹内宏一名誉教授）のご協力を得て、体制が整ったところです。

また遠州産業医談話会（代表世話人：内野文吾臨床講師）では、近隣の専属産業医を中心に、産業保健上の課題解決にむけた交流を行っています。当講座セミナー室等で年に数回開催しています。

そのほか当講座で主催している保健活動研究会では、公衆衛生・産業衛生分野の方々が年に１回集い、分野の枠をこえて交流しています。行政保健師の方からは「専属産業医の先生方との情報交換はとても貴重な機会になります」等の声を頂いています。これからも「つながり」を重視した活動を行っていきたいと考えております。　（中村美詠子記）

前列右より、岡田栄作助教、尾島俊之教授、中村美詠子准教授、柴田陽介助教

事　務　局　か　ら

平成26年度総会決議から

平成25年度事業報告

1．総会を6月22日（土）に岐阜市で開催した。

2．理事会を4回（6月8日、8月31日、12月7日、平成26年2月9日）開催した。

3．平成25年度日本産業衛生学会東海地方会学会を開催した。

10月26日（土）10:00～16:50　愛知医科大学

学会長：柴田英治(愛知医科大学医学部衛生学講座)

プログラム：一般演題　15題

特別講演１「環境因子による健康障害のメカニズムを追及する－基礎研究の成果を産業現場へ－」

加藤昌志（名古屋大学大学院医学系研究科）

特別講演２「職場のメンタルヘルスと法」

三柴丈典（近畿大学法学部）

ミニシンポジウム「産業保健専門職　どう育てるのか、どう育つのか」

水谷聖子（愛知医科大学看護学部）

柴田英治（愛知医科大学医学部）

参加者数：194名（会員100名、非会員94名）

4．平成25年度日本産業衛生学会東海地方会総会ならびに研修会を開催した。

6月22日（土）10：40～17：10

じゅうろくプラザ（岐阜市）

企画運営委員責任者：黒川淳一（医療法人桜桂会犬山病院、東海学院大学）

特別講演1「職場における熱中症予防対策とその実施状況」

井奈波良一（岐阜大学大学院医学系研究科）

特別講演2「ストレッチングの理論と実際」

川口純子（公益財団法人岐阜県体育協会）

特別講演3「うつ病にならないために：リラックスと集中の体験」

塩入俊樹（岐阜大学大学院医学系研究科）

参加者数：84名

5．地方会四部会による活動が以下のように実施された。

1）産業医部会

第8回産業医部会懇話会　12月7日

中部大学名古屋キャンパス

テーマ：「海外勤務者の健康管理」

講演：「海外赴任者の健康支援－安心して海外生活を送るために」

廣田直敷（トヨタ自動車㈱）

特別講演：「海外赴任者の感染症予防」

濱田篤郎(東京医科大学病院渡航者医療センター)

参加者数：38名

2）産業看護部会

①第1回看護部会懇談会　8月31日（出席者：10名）

②産業看護職継続教育システム短縮Nコース

（主催：静岡産業保健推進センター）

6月8日、6月22日、7月6日、7月20日

参加者数：延べ108名、内全科程終了者22名

③産業看護職継続教育システム短縮Nコース

（主催：愛知産業保健推進センター）

6月29日、8月10日、9月14日、10月19日、11月2日、12月14日、平成26年1月18日、2月15日

参加者数：延べ217名、内全科程終了者18名

3）産業技術部会

東海産業衛生技術部会第5回特別企画　12月14日

浜松アクトシティー

講演1：「職場における腰痛予防対策指針の改訂について」

岩切一幸(独立行政法人労働安全衛生総合研究所)

講演2：「東日本大震災とアスベスト問題」

外山尚紀（東京労働安全衛生センター）

参加者数：28名

4）産業歯科部会

産業歯科部会第8回研修会　平成26年2月2日

アイリス愛知

講演：「衛生学四方山話」

中垣晴男（愛知学院大学）

参加者数：11名

6．第26回産業保健スタッフのための研修会を開催した。

平成26年2月22日（土）10：00～16：50

名城大学薬学部

企画運営委員長：中元健吾（日本ガイシ㈱）

講演Ⅰ-1「定年延長に伴う産業保健活動での健康管理」

佐藤博貴（ブラザー工業㈱）

講演Ⅰ-2「転倒災害の防止について～健康管理・職場改善の観点から～」

赤津順一（中部電力㈱）

講演Ⅱ「薬に頼らない精神医学　労働者に伝えるべきセルフケアとは？」

井原裕(獨協医科大学越谷病院こころの診療科)

講演Ⅲ「食の行動変容につながる栄養指導」

鈴木志保子(神奈川県立保健福祉大学栄養学科)

講演Ⅳ-1「法的側面からみた化学物質管理の現状と現在の化学物質管理における課題」
榊原洋子（愛知教育大学保健環境センター）
講演Ⅳ-2「作業環境測定機関は作業環境測定における測定・評価・改善にどのように関わっていくべきか？」
山下素弘（㈱大同分析リサーチ）
参加者数：113名（会員：56名、非会員：57名）

7．地方会内の研究会活動を以下のように実施した。

1）振動障害研究会

第27回振動障害研究会　平成26年2月15日
名古屋大学医学部保健学科

1．「2009年7月10日発出指針について」
前田節雄（近畿大学）
2．「振動工具管理責任者向け簡易型手腕振動計測装置の開発」
前忠良（㈱大興）
3．「振動工具管理責任者向け講習会の案」
前田節雄（近畿大学）
4．「機器のデモ」
清水和也（㈱DEED）

2）学術連携研究会

第5回産業衛生学術研究討論会　平成26年2月15日
名古屋市立大学医学部
テーマ：「産業衛生学術調査研究、何をしたい、何ができる？」
第１部：「学術調査研究テーマを求めて」
第２部：「連携および進め方の提案」

8．地方会ニュースを2回発行した。
第80号（7月1日）、第81号（平成26年1月1日）

9．事務局の管理でUMINに設置したホームページを運営し、地方会関連行事や理事会の案内などを行った。（http://tosh-net.umin.jp/）

10．本部関連学会の運営
第23回産業医・産業看護全国協議会
会期：9月14日、26日～28日
会場：名古屋国際会議場（14日：愛知教育大学）
テーマ：連携、そして発展！産業保健の未来を問う
企画運営委員長：斉藤政彦（大同特殊鋼㈱）
参加者数：1,032名

地方会理事会

平成25年度　第４回理事会

日　時：平成26年2月9日（日）10:00－12:00
場　所：中部大学名古屋キャンパス
（6階・610講義室）

【議題】

Ⅰ．前回理事会議事録（案）の確認
Ⅱ．報告事項
1）本部理事会 2）地方会事務局報告事項（会員状況）3）第26回産業保健スタッフのための研修会 4）平成26年度総会ならびに研修会 5）平成26年度地方会学会 6）部会・研究会 7）愛知県医師会産業保健部会 8）地方会ニュース 9）関連学会
Ⅲ．協議事項
1）平成25年度地方会会計報告（案） 2）平成26年度地方会予算（案）3）中央選挙管理委員会への委員推薦（一人）について 4） その他

平成26年度　第1回理事会

日　時：平成26年6月21日（土）10:00－12:00
場　所：中部大学名古屋キャンパス
（6階・610講義室）

【議題】

Ⅰ．前回理事会議事録（案）の確認
Ⅱ．報告事項
1）本部理事会 2）地方会事務局報告事項（会員状況） 3）第26回産業保健スタッフのための研修会開催報告 4）平成26年度総会ならびに研修会について 5）平成26年度地方会学会準備状況 6）部会・研究会 7）愛知県医師会産業保健部会 8）地方会ニュース 9）平成27年度の総会ならびに研修会、地方会学会について 10）関連学会 11）その他
Ⅲ．協議事項
1）平成25年度地方会会計報告（案）、事業報告（案） 2）平成26年度地方会事業計画（案） 3）地方会名誉会員の推挙 4）学生会員について 5）地方会選挙管理委員の委嘱について 6）その他

会員の異動

【新入・再入会員】

愛知

①辰巳一裕（一般財団法人近畿健康管理センター）②鬼塚知里（愛知医科大学大学院）③矢加部愛子（トヨタ自動車㈱）④犬飼勢津子（豊田合成健康保険組合）⑤澁谷きよみ（渋谷病院）⑥藤江正人（フジ歯科）⑦伊藤千佳（リンナイ㈱）⑧犬飼恵（三菱重工業㈱）⑨内田恭裕（うちだ歯科）⑩萩倉祥一（トヨタ自動車㈱）⑪横山絵美（日本たばこ産業㈱）⑫宗宮千恵子（富士通エフ・アイ・ピー㈱）⑬塚本愉衣（旭硝子㈱）⑭長屋美代子（㈱スズケン）⑮澤田達哉（㈱ジャパンディスプレイ）⑯藤永典子

（㈱フジミインコーポレーテッド）⑰鈴木奈奈（豊田市役所）⑱奥村健二（トヨタ車体㈱）⑲菅屋潤壹⑳七浦広志（トヨタ自動車㈱）㉑柴田豊治（厚生連渥美病院）

三重

①宮原雅美（中部電力㈱）②中村智美（パナソニック㈱オートモーティブ&インダストリアルステムズ社）③土性佑里那（三菱化学㈱）④大野秀和（本田技研工業㈱）⑤安田智子（三重大学大学院）⑥田島和雄（三重大学大学院）⑦上坂吉男（近畿日本鉄道名古屋健康管理センター）⑧吉田祐子（住友電装㈱）⑨山田知佳（住友電装㈱）

静岡

①影山善彦（聖隷健康サポートセンターShizuoka）②望月友美子（静岡県立大学大学院）③坂本智江（聖隷健康サポートセンターShizuoka）④尾崎克年（立華㈱）⑤吉水京子（社会福祉法人聖隷福祉事業団聖隷予防検診センター）⑥米山弥生（社会福祉法人聖隷福祉事業団　聖隷予防検診センター）⑦齋藤誠（公立森町病院）⑧鈴木康子（三菱電機㈱）⑨堀場公寿（聖隷健康サポートセンター）

【退会会員】

愛知

①鈴木日美子（名古屋市立大学大学院）②奥薗洋子（豊生ブレーキ㈱）③大橋裕子（中部大学生命健康科学部）④山田洋子（トヨタ自動車㈱）⑤伊藤圭人（日本特殊陶業㈱）⑥吉川泰子（明治安田生命保険組合）⑦小栗正光（日本軽金属㈱）⑧渡会敦子（中部ろうさい病院予防医療センター）⑨舘わかな（犬山病院）⑩大澤早苗（犬山病院）⑪森本裕己（犬山病院）⑫陣内伸子⑬三浦昌子（名古屋大学医学部附属病院）⑭近藤輝明（ルーツストーンデンタルクリニック）⑮本多恭子（愛知県農協健康保険組合）⑯矢部誠太郎（トヨタ自動車㈱）⑰丹羽さゆり（㈱ジェネラス　デイ・サービス暁音）⑱清水幸（東海郵政健康管理センター）⑲佐野恭之⑳嶋内明美（トヨタ車体㈱）㉑杉山由樹（木戸病院）㉒加藤忠之（豊田合成井之口診療所）㉓安藤詳子（名古屋大学大学院）㉔榊原ひとみ（大同特殊鋼㈱）㉕国広真希（豊田通商㈱）

岐阜

①小西美智子（岐阜県立看護大学）②綿貫ルミ子（ソニーイーエムシーエス㈱）

三重

①岡本まや（中部電力㈱）②神田浩路（三重大学医学部附属病院疫学センター）③橋本峰子④世古口和代（シャープ㈱）⑤三浦美香（住友電装㈱）⑥北村玲（三菱化学㈱四日市事業所）

静岡

①望月友美子（静岡県立大学大学院）②村山隆志③鈴木淳子（パナソニックモバイルテクニカルサービス㈱）④白川健太郎（白川内科）⑤井口真美子（大興製紙健康保健組合）⑥望月幸子（富士フイルムグループ健康保険組合）⑦高比良有香（プライムアースＥＶエナジー㈱）⑧阿部幸洋（聖隷沼津健康診断センター）⑨戸川可奈子（パナソニックモバイルテクニカルサービス㈱）

【転入会員】

愛知

①中島紗織（パナソニックエコソリューションズ電路㈱）

静岡

①近藤祥（社会福祉法人聖隷福祉事業団聖隷健康診断センター）②坂本和志（浜松労災病院）③益田和幸（ジヤトコ㈱）④吉田勝也（トヨタ自動車東日本㈱）

【転出会員】

愛知

①尾本大輔（産業医科大学）②金子弘史（東海旅客鉄道㈱）③毛利一平（特定非営利活動法人　東京労働安全衛生センター）④飯田忠行（県立広島大学保健福祉学部）⑤村田健三郎（龍谷大学）⑥市原学（東京理科大学）⑦川上友香⑧高橋麻季子（厚生労働省中部空港検疫所支所）

岐阜

①高山直子（近大姫路大学）

三重

①川瀬洋平（三菱化学㈱）②栗原隆（㈱アスポ）③山西真彦（介護老人保健施設田辺すみれ苑）

静岡

①山口保子（サントリーホールディングス㈱）②渡邉晋太郎（産業医科大学）③安藤肇（産業医科大学）④吉川恵造（本田技研工業㈱浜松健康管理センター）

【地方会内異動】

①石田猛大（アイシン精機㈱）②大久保浩司（トヨタ自動車㈱）③越川加奈子（プライムアースＥＶエナジー㈱）④及川佐枝子（椙山女学園大学）⑤高橋一矩（東芝テック㈱）⑥小澤福示郎（三菱自動車エンジニアリング㈱）

【特別会員退会】

①三井化学㈱名古屋工場環境安全部

【物故会員】

静岡

植松稔（佐藤病院）平成25年3月ご逝去

開催報告（既出以外）

平成26年度総会ならびに研修会

日　時：平成26年6月21日（土）13:10－17:00
場　所：中部大学名古屋キャンパス
（6階・610講義室）
内　容：東海地方会総会
講演「職場ストレス研究に関する国内外の話題」
小林章雄（愛知医科大学衛生学講座　教授）
シンポジウム『職場メンタルヘルスにおける支援の実際』
「メンタルヘルス支援促進員として」
吉田有里（愛知産業保健推進センター）
「産業医の立場から」
斉藤政彦（大同特殊鋼　産業医）
「産業看護職の場から」
高崎正子（東芝四日市　産業保健師）
「精神科医の立場から」
舟橋利彦（仁大病院院長　精神科医）
参加者数：約130名

これからの行事予定

平成26年度地方会学会

学会長：笹島　茂先生（三重大学医学部）
開催日：11月22日（土）
会　場：三重大学医学部・総合医学教育棟（予定）

The 21st Asian Conference on Occupational Health（ACOH）

日　程：平成26年9月2日（火）～4日（木）
場　所：ヒルトン福岡シーホーク

第42回産業中毒・生物学的モニタリング研究会

日　程：平成26年10月25日(土)午後～26日(日)午前
場　所：松本市中央公民館（Mウイング）

第73回日本公衆衛生学会総会

日　程：平成26年11月5日（水）～7日（金）
場　所：栃木県総合文化センター、宇都宮東武ホテルグランデ、ニューみくら
宇都宮共和大学 宇都宮シティキャンパス
（自由集会　会場）

職場ストレス研究会

日　程：平成26年9月10日（水）14：00～16：00
場　所：ウインク愛知1204会議室
講　師：大嶋先生（浜松市メンタルクリニック）
テーマ　発達障害の理解を深めるために

編　集　後　記

東日本大震災から３年が経過しました。私事ですが、当時幼稚園入園前だった長女が４月に小学校に入学し、月日の経つのは早いと実感しています。震災直後に浜松市医師会の医療支援で陸前高田市を訪問した経験を活かして、社内の応急救護訓練の講師を務めていますが、３年の間に社内防災対策も少しずつ発展していると感じます。

地震に限らず、新型インフルエンザの流行や重大災害等、産業保健の分野でも突発事態が起こりえますが、常に「治に居て乱を忘れず」の心がけで、普段からいろんな研鑽を積んで行きたいと思っています。

ヤマハ　山本 誠

東海地方会ニュース
編集委員長　：石川　浩二（三菱重工業）
副編集委員長：西谷　直子（椙山女学園大学）
編集委員　　：池田友紀子（キヤノン）
榎原　　毅（名古屋市立大学）
河南　文子（富士電機）
後藤　由紀（四日市看護医療大学）
城　　憲秀（中部大学）
守田　祐作（新日鐵住金）
山本　　誠（ヤマハ）

東海地方会事務局
〒 480-1195 愛知県長久手市岩作雁又 1 番地 1
愛知医科大学医学部衛生学講座内
TEL：(0561)62-3580 FAX：(0561)62-3580
E-mail：aratokai@aichi-med-u.ac.jp

印刷・製本
富士ゼロックスサービスリンク株式会社
TEL：(052)412-5251　FAX：(052)412-1440